
機械人形とぼっち人間

白餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械人形とぼっち人間

【Nコード】

N7608Y

【作者名】

白餅

【あらすじ】

上司に酷く叱責され、周りの同僚からは蔑まれている主人公、豊とよ頃ころ誠人は廃棄処分なりかけで、セールに出されていた家事機械人形を偶然見つける。埃を被る姿に自分と重ね、誠人は衝動的に買ってしまう。そして始まったのは、ぎこちない、けれど、不思議と悪くない、ロボットと底辺主人公の同居生活だった。

00 - 喪いたくなかった気持ち

音が、聞こえる。

歓喜に満ちた、心地よい旋律。

同時に薄れていく何か。無くしてはいけない。喪失してはいけない。そのはずだった。いや、もうとつくのとうに喪っていたのだが、唐突に蘇ってきたのだ。一回は手放した。しかし、醜く私は、それを逃がさないとする。

あまりにも過去にとらわれ続けていた自分がいて、それが情け過ぎて、涙が出てくる。

思い出だけで生きていてるほど、私は、単純ではない。だけど、喪つては生きていけなかった。忘却も喪失も望んでいなかったはずなのに。なんでこんなことになってしまったのだろう。

世界を覆う、重たい雲と淀んだ空気。荒廃した世界に、人間は私しかないかった。

ざあざあと、雨が降っている。

壊れかけの少女^{わたし}は、最後の記憶を必死に繋ぎ止め、目をつむった。その方が、まだ繋ぎ止めた気がしたから。

やがて、目をゆっくり開くと空を見上げ、最後の言の葉を紡ぐ。ずっと、言えなかった。けれど、ずっと、言いたかった。

もう、最後で。

届くかはわからないけれど。

『私も、

したいです――、マスター』

01 - 機械人形

二週間前に壊れた電子レンジ。

壊れてからどうにか直そうと尽くしたが、型が古かったために直すことは出来なかった。長年使っていた機械には、愛着が沸いてしまふ。棄てる日、どうしようもなく悲しく感じたのは不思議な話だった。

今日、二代目となる電子レンジを買いに来た。新しいのは何かと面倒くさそうだったが、折角なので最先端の電子レンジを買うことにした。

「59568円になります」

高い、と心底思いながらキャッシュカードで支払いを済ませることにする。

レジは、とてつもなく美人の顔をした女性だった。年は二十代後半といったところだろう。人間離れた妖艶さと美人さ違和感を覚えた。普通に、電気家電メーカーの服とはっぴをきているが、どうも不釣り合いだ。しかも、髪は金色で、腰まである。どこからどう見てもアメリカ人だとかの異国人に見えるのに、本能的に違うと思う。

自然と、目が、名札にいった。

——試用運転中 お仕事代理機械人形“杏寿”

途端に、納得した。機械人形なら当たり前の容姿だ。

機械人形は半世紀前から売り出されている、プログラミング式のロボットである。限りなく人間に近い行動、言葉、そして人間以上の仕事の早さ、運動能力、容姿。この辺りは、さすがロボットというところか。

もちろん、普通に対話もできるし、ニュースなどで情報収集をし、言語を増やすこともできる。まるで赤ん坊のように、見たこと聞いたこと全て記憶してしまうのだ。

よっぽど人間よりも高性能で、いつしか全て機械人形のものになってしまいそうで恐ろしい。

機械人形所有者は金持ちから始まったが、今は、もう一般者にも届く安さになっている。老若男女、すべて揃っていて、体格体型は機械人形に言えば、自由に変わるらしい。

近頃は一層よく見るようになったが、一般者が買える金額のものは、基本的に喋り相手くらいで、知識を増やせない、幼い男女をモチーフにしたものだ。機械人形の種類は、仕事、警備、各稽古、家事、愛玩と様々で同じ種の型でも、人間同様に同じ顔はない。

こんな立派な機械人形も、今まで五万と見てきた。人形ならば当たり前前の容姿だし、今さら驚くこともない。目を滑らせば、警備員の服を着た機械人形——男らしい——、がいた。やはり、こちらも相応に端正な顔をしている。

レジで会計を済まし、帰路につく。

しかし、やはり羨ましかった。あんなに容姿端麗な人形ならば一人や二人欲しくなる。機械人形を盗む人々の気持ちも分らないでもなかった。

盗むとは言えば、機械人形を犯罪に使用したりする馬鹿なものが出たので、買う際には身分証明書やらを必要とする。

前に欲しいと思い、店頭に並んでいたのを見たことがあるが、どれも二十万とかで、高いのだと、二百万はゆうに超えていた。

ネットだと、オークションで安く売っているが、どれも金だけ取って配送はしないものばかりだ。誰か良くて容姿端麗な機械人形を売るか。機械人形は主人に従順であるために、売ろうと思う人はいなかったのだ。

電気家電メーカーの店から離れ、雑踏を抜け、やがて人通りの少ない、親しんだ道になった。仕事帰りはいつも通る道だったから、何となく足早だったのが、緩くなる。もう、日がくれていた。時刻は20時くらいだろうか。

「——ん？」

気付くと、道路を挟んだ道端に小さな電気家電のお店があった。いつも不定期で開いてるから、開いてるとは思ってもみなかった。どうせなら、地域貢献でこっちで買えばよかったと思いつつ、電気のためが切れていたことを思い出す。

車が来ないことを確認し、道路を渡ると、電気家電の店に入った。

店に主人の気配はなかったが、奥からTVの音が聞こえるから下がっているのだろう。

彼は、家の蛍光灯と同じ型を探していると、此処でも機械人形を

売っていることに気がついた。しがない店だと思っていたから、機械人形を置いてるとは意外だ。収益はしっかり出てるのか、他人事ながらに不安である。

機械人形は、一mの高さの箱に入っていて、初回はねじまきをしないと動かない。ねじまきをすると、次回からは自分でするらしい。一般に出回る安めの、会話しかできない機械人形は、主人がまわさないといけないとか。

ふと、ひとつの機械人形の箱に目がいく。いかにも開けましたというような、後が残っている。しかも、箱には「売れ残り」という紙が張られていて、驚くことに値段が4万円と格安だった。

思わず座り込んで見る。箱には、機械人形をつくったエレニフ社のポップがデザインされており、注意事項が書かれていた。だが、機種名は書いていない。

「どうだい。買ってみるかい？」

「——っ！」

突然声を掛けられ、体を震わす。

横には、いつの間にか主人が立っていた。背が曲がっていて、随分な歳のようなが、優しそうな、柔和な笑みを浮かべている。

「い、いえっ！ 安いなあ！ って思って！ まあ、僕買う金ないんですけどねっ！」

慌てた様子で立ち上がると、蛍光灯の方に行き、家の型のものを一瞬で判別して、手に取った。そして、主人に差し出し、受け取ってもらうと同時に財布を取り出す。

「ふむ。——お兄さん、人見知りかい？」

「え？ あ、はあ、まあ、恥ずかしいことに」

自分の短所を指摘され、顔が熱くなるのを感じた。彼の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「そうかいそうかい。なあに、悪いことじゃないさ。——千円ね」

主人は、人懐こい笑顔を彼に向けると、レジに向い、蛍光灯のバーコードを読み込む。

彼は、黙って千円を渡し、蛍光灯を手にとると、出口に向かった。

「……お兄さん、さっきの機械人形、一週間サービスっていうもんがあるんだが——、してみないかい？」

彼の背を見ながら、思案顔になった主人が投げ掛ける。

「え、」

「別に買わんでもいいよ。その機械人形は、二、三回、サービスをしたんだが、買ってはくれなかったものだから」

「い、いいんですか？」

彼が、歓喜の色をたたえ、振り返る。願ってもなかった事だった。一回は機械人形を手にしてみたかったのだ。機械人形がこういうものか知らなかったし、お試しがあれば、こういうものか分かる。即決だった。

03 - 人形とマスター

心臓を高鳴らしながら、人形の後ろに座禅を組む。精神統一を、平常心を取り戻そうとした。

彼の前には、コードでコンセントに繋がれた少女。濃紺の髪がよく似合う少女だった。髪は踵ほどまでと長い、今回はお試しサービスなので、髪を切るのは御法度らしい。少女は、彼より、六つか七つ下に見えた。彼が二十だから、つまり十五か、十六だろう。

箱から出すと、黒の下着しか着用していなかった。それを見たときは、正直襲いそうになったが、寸でのところで理性を取り戻した。

Yシャツを着せてみると、案の定大きかったが、女物の服はないので仕方ない。

この機械人形は、当たり前だが、人間と見違うほどに、柔らかく暖かな体をしている。体のメリハリもしっかりしてるし、容姿はやはり美しい。色々なところで目にしているとはいえ、感激せざるおえなかった。

ふう、と小さく息を吐き、横たわる人形に背を向けると炬燵に入る。そして、そのままパソコンを開いた。

ネットサーフィンをしていると心が落ち着く。

「釣り乙、っと……」

笑みを含みながら、掲示板に書き込みをし、すぐに違うウィンドウスを出す。

彼は最近会社をリストラされたので、しばらくは貯金での生活になる。機械人形は食事をしないので、さほど支障にはならないだろう。

アルバイトを探さねばならないが、どうも気力が起こらずにいた。通帳は、ぎりぎり一年は暮らせるくらいだ。だが、どうしても焦る気持ちにはならなかった。

「新参乙……フヒツ」

「これは、どういうもののなの？」

「え？ あ、いやっ！」

唐突に声を掛けられ、慌ててパソコンを閉じた。見られたかと焦り、声のもとである方を向く。

「は!？」

真横に、淡いオレンジ色の瞳をもつ、整った顔があった。なにがおこった、と訳が分からなくて、目を見開く。濃紺の髪、人間離れた美貌と、感情をうつさない目。

彼女から顔をそらし、後ろを向くと、そこに横になっていた機械人形の姿はなかった。つまり、充電が終了し、起動した機械人形。人形とは思えないくらい、人間に近かった。しっかり自発呼吸もしているし、声も柔らかい少女らしい声だ。

「これは何」

機械人形が今一度訊ねた。彼が顔を戻すと、機械人形は閉じたパソコンを見ている。

「これは……えっと、personal computerっていつて、その、略称でPCと言って……」

こもった声で説明する。

「ぱーそなるこんぴゅーた、ぴーしー、ぱそこん。把握しました。知識としてありますが、現物は初めてです。確かに、このような物がぱーそなるこんぴゅーた、と言いますね」

淡々としたものの言い方で、機械人形はPCに触れた。

「それで、あなたが私のマスターなのですか？」

しばらくして、PCから手を離すと、機械人形は、こたつを挟んで彼の前に正座した。

「あ、……ああ、まあ、えっと、お恥ずかしいことに一週間サビスっていつもので……」

いざ言つと、申し訳なく感じる。

「そうですか。それで、御名前は何とおっしゃるのですか？ 一週間といえど、マスターには代わりありませんので、御名前は把握しとかねばなりません」

機械人形の感情を宿さない声に、物怖じしながら、彼は、頬をかいた。

（機械人形って、こつも感情がないのか？ それとも、生活の上で身に付けるのか？）

眉間に皺を寄せる。確か、レジにいた機械人形は笑顔だった気がするが、上っ面だけだったのだろうか。命じられたから、笑っていたのだろうか。

「マスター、御名前は」

「あ、はあ、ええっと、その。……豊頃 誠人っています」

会社以外で女と喋るのは久しぶりだった。それでか、誠人自身にも分かるくらいに声は小さく、震えている。会社だったら事務的にしゃべっていたし、今もそうすればいいのだが、うまく切り替えない。

「とよころ まこと、ですか？ 漢字は」

機械人形は特に、声が震えているだの指摘しないで、しかもしっかり声を聞き取っていて、若干恥ずかしさが薄れる。

「豊頃は、豊臣の豊で、頃は、この頃の頃。誠人は、ごんべんに、成ると人で……」

先程よりは、少しはつきり言えた。

「わかりました。豊頃 誠人様ですね」

すると、機械人形の目が数回点滅する。機械人形が物事を記録する際の、特有な事だ。

「えっと、君の……名前は？」
「ありません」

即答だった。

「ありませんので、ご自由にお呼びくださいませ」

「じゃ、じゃあ、君の前の主人は何てよんだの？」

即答に困惑しながら、めげずに質問する。機械人形が、少し沈黙してからいい放つ。

「固定はありませんでした。一週間のうちに呼ばれたのは、雌豚、ビッチ、マゾ、淫乱娘……」

「うわあああ！ ストップストップ！」

慌てて口でとめ、手を左右に勢いよくふる。すぐに、口は止まった。

「なんなの、君。前回何されたの？」

「性欲処理に」

恥じらいもなく、機械人形はごく自然に言う。

「え、で、その人は？」

「個人情報保護法に違反せずに言いますと、前マスターは一週間、私で性欲処理に使用しました後、しっかり私を返納しました。規約違反していないため、普通に生活してることでしょう」

「なにそれ、君は抵抗しないの？　ってか法律的に……」

「機械人形に関する法律は、機械人形使用取り締まり法のみです。それには、機械人形を使った犯罪に関するのみです。私は、マスターに従うために存在しますから、性欲処理でもなんでも喜んで致しますよ。機械人形は、マスターを愛するという大前提のプログラムがありますから」

淡々と言う機械人形に、寒気を催した。機械人形には、種類があり、警備や、各稽古など様々あるが、それはひとつの事に特化しているだけであり、それしかできないわけではない。今回、彼——誠人が借り受けたのは家事をする機械人形だが、食べ物を食すのも、排泄機能も備わっている。卵子はないが、卵巣に似せた機能もある。故に、性行為も出来ないことはなかった。

「……マスター、気にすることはありません。世の中にそういうことをされる機械人形は多いです。愛玩用は壊れやすいので、愛玩用ではない機械人形するかたはたくさんおりますし。」

気まずさを破り、機械人形は言ってくれた。もしかすると、雰囲気が悪くした罪悪感を感じたのかもしれない。

「そ、それじゃ、君には名前がないの？」

話を強制的に戻し、訊ねる。

「固定はありませんが、雌豚などが――」

「うわああああ！　じゃ、僕が決めるからさ！」

え、と機械人形は驚いたように目を瞬いた。やっと見せた感情の片鱗に、安心する。

「そうだなあ……、なにがいいかなあ。幸多き子になってほしいから……幸子？　うーん」

腕をくみ、首をかしげる。

「あ、でも明るい優しい子になってほしいし……、んー……。あ、そういえば型の名前は？」

「……型の、名前ですか？」

驚いていた機械人形は、眉に皺を寄せた。思っていたより、感情豊かなのかもしれない。

「箱に書いてなかったから……」

ああ、と機械人形が頷く。

「私は初期型なので、ひとくくりに初期型とされておりす」

それを聞いて、誠人はさらに悩んだ。人の名前なんて、このかた考えたことがない。いざ考えると、中々良いのが思い付かなかった。

『マスターを愛するという大前提のプログラムがありますから』

ふと、頭に浮かんだ先程の言葉。

（愛すっていう、プログラムかあ……）

更に考える。

（なら、愛される人形でもいいよなあ）

そういえば、自分の名前はどやって思い付いたのだろうと思う。大方意味は分かるが、聞いたことがなかった。まさか、名前をつけるのがこんなに大変とは思ってもみなかった、が。

「千愛、なんてどうだ?」

「ちあ……ですか?」

「ああ、千の愛って書いて、千愛」

「千愛……ですが、愛はあ(・)とは読みません」

機械人形が、淡々といって、誠人を見据える。

「そこはいいんだよ。名前ってそんなもんだし……」
「……そうなんですか」

チカチカと、機械人形の目が点滅する。

「では、以降、千愛と名乗るようにします」

少し恥ずかしそうにして、機械人形——、千愛は薄く笑った。

「ああ、これから一週間だけけど……。よろしく」

「はい、よろしく願います。マスター」

そういつて、千愛が三つ指を置いてお辞儀をするから、あわてて
誠人もお辞儀した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7608y/>

機械人形とぼっち人間

2011年11月26日23時47分発行